

## 2. タオルとの出会い

### 「田舎で生まれて、ようけ子どもがおるから早く働け働け」 ってタオル業界に入った

宮田正志氏は、1944年9月に喜多郡内子町で生まれた。父親は農業にいそしむ傍ら、山林の傾斜地を利用して葉タバコも栽培していた。昔では珍しくない7人の子でくさんで、上には長男、長女、次女、下には三男、三女、四女がおり、宮田氏は上から4番目の次男である。

幼少の頃からモノづくりが大好きで、ラジオを手製して周りの大人たちを驚かせたことがある。手先の器用な宮田氏がタオル業界に入るきっかけとなったのは、中学校の掲示板に貼られていた就職斡旋のチラシであった。内子町出身の宮田氏にとってタオルは未知の世界であったが、「田舎で生まれて、ようけ子どもがおるから早く働け働け」と周りから言われ、またモノづくりが好きだったこともあり、技術者の卵として1959年4月に城南織物(株)に入社した。

入社後、徒弟制度さながらの厳しい環境の下で、タオルについて学ぶ日々がつづいたが、織物の組織や機械について考えるのは好きだった。根っからの負けず嫌いが高じて、誰よりも早く知識を修得し、誰よりも早く仕事をこなそうと毎日必死だった。


入社して翌年の1960年、「どの機械にも電気が入るとるからね、電気やらなあかん、もうしゃあないわい」と奮起して、織機の据付けや修理、改善に必要な電気の勉強をするために愛媛県今治工業高等学校（定時制）の電気科に入学した。働きながらの勉強は想像以上にたいへんだったが、ここでも負けず嫌いの宮田氏は4年間みっちり電気に関する知識を身に付け、キャリアの向上を図った。

丸長(株)（現在は廃業）へは1963年にヘッドハンティングで転職した。設立者の長井雪夫氏が新しくタオル工場を新設する際に、織機や整経機など一連の機械の据付けや調整などが必要となり、城

南織物で活躍していた宮田氏を工場長として引き抜いた。同社の経験をとおして、宮田氏はタオルの準備工程から製織工程の機械の設置、調整、改造など、何でもひとりでやれる技術を身に付け、のちの独立に非常に役立った。


1975年、繊維関連の機械を販売する越智文商事(株)に移り、多種多様な機械の販売や修理に従事し、技術的な知識のみならず機料品店に必要な営業のスキルも培った。この頃、革新織機の時代に突入し、とくにレピア織機が市場を拡大していった。「レピアという機械が入ってきて、みんなたまげたんよね。それからレピアを研究し、レピアを持って大阪や名古屋の方々に行って営業したんよね。レピアの良さが伝わりかなり売れたんやけど、高いからもっと安いのをつくれという要望がお客さんから出てきて、日本の機械メーカーががんばってつくった。」ちなみに、スイス製レピアが1,200万円の時代、国産レピアは1,000万円を切った。

取扱う機械が国産の場合はそのメーカーに行き、海外の場合は商社を介して海外まで赴き、数週間程度の長さで研修を受けて機械のいろはを徹底して勉強した。機料品店は扱う機械に関してはプロフェッショナルの知識が要求されるので、このようなプロセスは避けては通れない。

さらには、越智文時代の1975～1979年の間、宮田氏は自らの名前で**実用新案**  の申請・登録をおこなっており、いくつかの発明を残している。宮田氏は当時を振り返って思うことがある。「わたしがね、『社長、こういうもんつくったんですが』って言ったら、社長が『宮田くん、素晴らしいけど、わしはひとつ売るよりは二つ売れた方がいいぞ』って言うから、なんやっと思ったけど、自分が独立してみたら社長が言っていたことがよくわかりましたわ。商売には良いものつくってひとつで済むより、二つ売った方が儲けええでしょ。ああ、なるほどと思って、いまは社長の言っていたことがよくわかる。」技術者は技術のことだけを考えていればいいが、経営者はそうはいかない。独立してから技術者であり経営者でもある宮田

氏は、当時の社長との思い出を懐かしく語る。


### 3. 独立

宮田氏は、越智文商事と取引のあった商社のグンゼ産業(株)  が新たにスイス製の織機を扱うということで、これを機に独立の話が浮上した。機料品店は、取扱う機械メーカーの代理店としての機能を果たしており、そのメーカーの機械については熟知していなければならない、機械の種類別に設置や修理、改善をおこなう。そのため、新たなメーカーの機械を扱うとなると、機料品店側に相当な手間とコストが発生する。海外の機械メーカーの商品となれば、負担は相当なものになる。そこで、宮田氏は商社の打診と協力を得て、




宮田ルームサービスの事務所外観

スイスの機械メーカーの専門機料品店として独立を決意する。

1979年、宮田氏は、資本金1,000万円で(株)宮田ルームサービスを今治市馬越町に設立し、スイスのサウラー社  の機械、とりわけレピア織機を取扱う

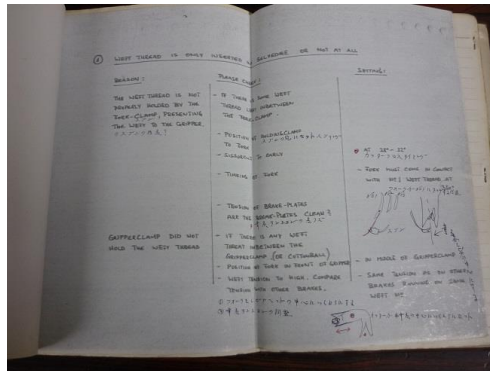
機料品店として独立の第一歩を踏み出した。事務所と作業場は妻の栄子氏の実家の隣に建てられた。会社の実質の機動隊は宮田氏本人と、事務を一手に任された栄子氏の二人だった。栄子氏は、宮田氏が独立する以前、他の会社で経理を長年経験していたこともあり、独立直後から即戦力として宮田氏を支えた。

起業してからはしばらくは、イタリアやスイス、中国などへ織機の輸入を仲介した伊藤忠商事や丸紅といった大手商社の社員と一緒に研修に訪れ、各機械メーカーの機械についてかなりの勉強を重ねた。いわば短期留学をして専門知識を学ぶわけだが、言葉の壁はあった

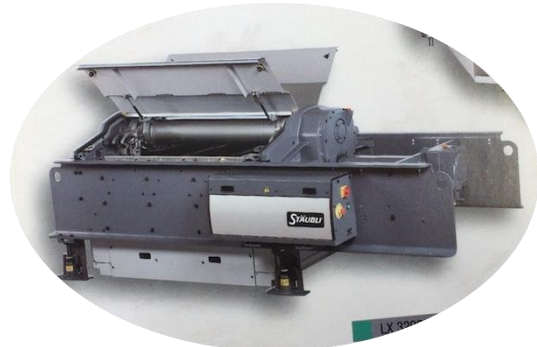
が、技術の壁はなかった。たとえば、イタリアのスミット社  での研修では、「絵を描いて意思疎通を図り、朝から晩まで覚えたことを全部メモ書きして、あとでノートにまとめ直し、いつ見てもわかるようにしたんよね。日本に帰ったら頼る人おらんし、日本でうちひとりやからね、必死」に研修を受けた。2週間におよぶハードな研修を終え、「もうひとりで大丈夫」というスミット社からのお墨付き（修了証）をもらってようやく帰国できた。



スミット社での研修で学んだことを書き込んだノート

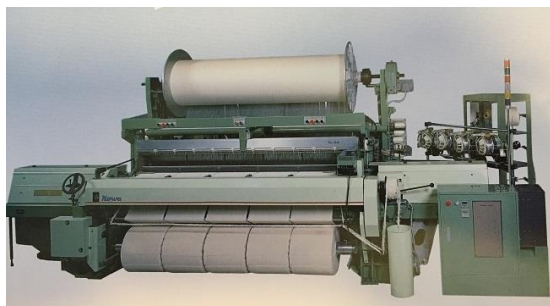


スミット社の修了証



スミット社のレピア織機とストーブリ社のジャカード機

その後、豊和工業(株)のレピア織機や(株)豊田自動織機のエア・ジェット織機なども販売するようになった。織機ひとつとってもさ



豊和工業のレピア織機  
（同社パンフレットより）

さまざまな装置からなっており、それを組立てたり修理・改造したりする作業は、素人が想像する以上に難雑で熟練の技術が必要とされる。豊田自動織機製のエア・ジェット織機を一例に挙げると、開口装置、経糸張力補正装置、経糸飛走自動制御装置、巻取装置、全自動一括給油装置、

電動別耳装置など多くの装置から成っている。しかも、これらの装置にジャカード機やドビー機を組み合わせるため、余計に複雑な構造になる。宮田氏は、各タオル工場がどんなタオルをつくりたいかによって、これらの装置や機械の組み合わせを考える。そして、タオル工場に設置したあともメンテナンスをおこない、不具合があれば修理し、仕上がったときのタオルのデザインに合わせて部分的に改造もおこなう。こうした作業を繰り返し、宮田氏は少しずつ仕事の幅を広げていった

（次号につづく）

